本実践・研究から見えてくること

研究協力者　鈴木　翔
（秋田大学教育文化学部）

今回行われた研究実践の重点は、「①よりよい合意形成に向けた手順・方法を選択し、共有するプロセスの工夫」、「②学校生活上の課題・解決策を具体的に捉え直し、改善点を見いだす省察の工夫」の２点にあった。

「①よりよい合意形成に向けた手順・方法を選択し、共有するプロセスの工夫」について

実践者が報告しているように、この点についてはかなりの成果があるように感じられた。本実践のみならず、日頃の教育実践の成果でもあるのだと思うが、子どもたちが複数の「話合いの技」を使って主体的に話合い活動に取り組んでいる様子が印象的であった。具体的な姿としては、近くの友達と意見を出し合う際に、これまでの全体で出た意見を自分なりに解釈しつつ、「これ付け足す？」「今出し合ってるからこれはあとでいい」などの声を掛け合って話合っている様子が見られた。単に「自分が思ったことを言う」「自分が言いたいことを言う」というのではなく、今ここで発言すべきことはなにかを整理して発言することができており、さらに「話合いの技」に当てはめて発言することを多くの子どもたちが意識しているように思われた。

また、意見を黒板に板書する子どもや司会にも配慮しつつ、「大事だとは思うが、話合いの趣旨に添わないもの」などは、司会に直接伝えに行く様子も見られた。これらの様子から、重点①の手順・方法のプロセスの工夫、共有するプロセスの工夫の両者を意識したかなり高度な話合いが行われていたことが推察できる。

②学校生活上の課題・解決策を具体的に捉え直し、改善点を見いだす省察の工夫

指導者の適切な助言もあり、多くの子どもたちは「学級団結のため」という点を注意しながら議論を進められていたように感じられた。一方で少数ではあるが、「学級団結のために意見を出す」のではなく、話合いを滞りなく進めるために、もっと良い考えや意見があっても手を挙げなかったり、時間を伸ばさないように気を遣って発言を取りやめたりする子どもの様子も見られた。もちろん、時間内にできることは限られており、本時の話合いで目指すべき到達点が共有されていたことの表れでもあるように思うが、そのバランスの取り方が「議論を収束させること」の方に偏りすぎているような印象を受けた。今後は、この点の改善のための手立てを工夫する必要があると思われる。